

スライドとシルエットを用いた朗読劇

「愛の讃歌——高村光太郎詩集『智恵子抄』より——」上演の試み

真 鍋 光

はじめに

昭和四十七年度から四十九年度までの三年間、新任教師として岡山県倉敷市立精思高校に勤務した。生徒数二百名余りの商業科普通科並置夜間定時制高校である。校下地域には、水島工業地帯をひかえ、地元倉敷の生徒は少なく、九州・岡山県北部を中心として、生徒の出身地は全国に散らばり、大手企業から通学する男子生徒には、四組三交替勤務者が多かった。

今日の定時制高校は、高度経済成長政策に伴う社会構造の変革がもたらした諸矛盾の集積の上にある。生徒の欠席、登校した多くの生徒の無気力、その低学力の根本原因は、そこに見出されなければならない。

教室に生徒がいなくては学習指導はできない。出席簿を欠席簿と言いかえてもよい現実が教師に要求する第一の課題は、まず生徒を登校させることである。生徒の登校を阻むもの・登校させるもの、その両者を的確に理解するためには、生徒の生活と意識の実態を認識する必要がある。私の場合、それは、生徒の故郷・家庭環境・寮

（下宿）生活・仕事の内容等を、個別的、具体的に認識することによって、過去の私の体験をその上に重ね合わせることでできない生徒の人間像を、心の内に形象化していくことであったように思われる。

教室における私の国語学習の営みは、教科書教材を生徒の学力に対応させることができず、授業のゆきづまりをまねくことが多かった。その連続であった。それは、生徒の国語学習の意欲化をはかる前に、教師である私自身の意欲化をいかにをはかるかが問われなければならないものであったと、告白せざるをえない。

以下に報告する「スライドとシルエットを用いた朗読劇」とは、私の担任していたクラスの文化祭の出し物として企画したものであり、授業は、「現代国語」の時間を六時間利用したに過ぎない。しかし、教師の予想を越えて生徒が意欲的に取り組んだことから、こうした作業を伴う創造の営みを国語学習に組み入れることが、活気ある国語教室の実現につながっていくのではないかと、このことを事後に反省し、その経過の概略を述べたものである。

昭和四十九年度文化祭担当の教諭が、その年の八月末、交通事故で重傷を負い、九月中旬、急きょ文化祭の教師側責任者となった。第三回文化祭は、十一月十三日（水）、十四日（木）の両日に予定されていた。

文化クラブとしては会員四、五名のフォークソング同好会があるだけの、小規模な定時制高校の文化祭は、クラスの出し物が中心となる。文化的行事に接した経験に乏しく、社会人としてさまざまな刺激にさらされることの多い生徒たちの発想から出てくるものは、出演者のイレブンPM調の卑猥なやりとりや、観客の笑いを誘う調子での「赤城の山も今宵限りか……」といったものになりがちである。教師として、その内容を、生徒の情操に培うものにしなうと考えた。

二 「スライドとシルエットを用いた朗読劇」上演の決定

九月下旬、その年から担任した普通科四年生のクラスの「現代国語」の時間に、文化祭の出し物について討議した。しかし、これといった意見は出なかった。そのため、同じクラスの二年次の授業で、「智恵子抄」の数篇をプリントして配布したところ、生徒が比較的関心を示したと、光太郎と智恵子のドラマチックな愛の姿は劇化しやすい点に着目し、「智恵子抄」に題材を採った、三十分程度の「スライドとシルエットを用いた朗読劇」を上演してみてもどうかと、教師の側から提案し、その上演を決定した。

「スライドとシルエットを用いた朗読劇」とは、ナレーションな

いし詩の朗読を常時流しながら、場面に応じて、観客席から向かって左半分の舞台上にスライドを映し出したり、舞台の右半分にシルエットによる演技を浮かびあがらせたりしながら、ときに舞台を暗転にし、あるいは床照明のみを用いても表現効果をねらう、という手法のものである。

たとえば、「樹下の二人」の詩の朗読にはいる場面においては、スライドボックスを利用して、徐々に阿多多羅山のスライドを舞台の左半分に映し出し、次に、その阿多多羅山を見あげる二人のシルエットを浮かびあがらせる。バックミュージックは、二人の満ち足りた気持ちを表すものにする。

シルエットは、シルエットとして固定する場合も、演技をする場合もある。たとえば、「梅酒」の詩の朗読の場面においては、梅酒の杯を口にはこぶ光太郎の演技をいれる。

精神分裂の最初の兆候として、睡眠剤の分量をまちがえた智恵子が九段病院に入院する場面においては、不安な、ぶ気味な感じのバックミュージックを流しながら、青色の床照明を点滅させ、次に、病院のスライドをぱっと映し出すのである。

通常の形態の演劇を試みることは、主として次の二つの理由から困難であった。

- (1) クラスの四十名の生徒の半数近い十八名の男子が四組三交替勤務者であり、2動（午後三時三十分から同十一時までの勤務）のときは登校できず、3動（午後十一時から翌朝七時半までの勤務）のときは放課後すぐに下校せねばならない。女生徒にも、月に十日を越える深夜勤務のある看護婦が四名いる。勤務外の欠席も多いことを考え合わせれば、出演者が揃って練習することは、

きわめて難しい。加えて、放課後に活動できる時間も短い。

(2) 演技会場となる視聴覚教室は、普通教室の二倍強の広さしかなく、舞台も観客席より十センチ程度高いだけで、その奥行きも短い。このような会場で練習不足の劇をやれば、観客の生徒が笑い出す恐れがある。

三 朗読劇台本「愛の讃歌——高村光太郎詩集

『智恵子抄』より——の完成

文化祭の出し物として朗読劇上演を決定した同じ時間に、クラスの中では傑出した文章表現力をもつK君が、朗読劇台本を書いてくることが決めた。

大手化学企業に勤めるK君は、「倉敷山の会」に属する先鋭的クライマーであるとともに、古典の授業で「伊勢物語」八三段を学習した際に、教師の紹介した惟喬親王の墓を、京都に旅行した折に訪れてみるといった文学青年でもあった。K君はまた、生徒会副会長として、教師とともに文化祭の成功のために腐心していたので早く引き受けた。

三交替勤務に従事する定時制高校生が、三十分の台本を二週間で書きあげるのには、容易なことではない。教師の側からは、「高村光太郎詩集」（岩波文庫）、「近代文学鑑賞講座第十六巻高村光太郎・宮沢賢治」（角川書店）、「日本文学アルバム19高村光太郎」（筑摩書房）の三冊の書物をK君に手渡し、その内容を利用しつつ、自分なりのものにまよとめてはどうかと助言した。

K君は、四百字づめ原稿用紙十二枚のナレーションのあいだに、「智恵子抄」の詩六篇をはさんだ、朗読劇台本「愛の讃歌——高村

光太郎詩集『智恵子抄』より——」を、二週間後に書きあげてきた。当初、この作品に題名はつけられていなかった。クラスの話し合いによって題名を決めようというのが、K君の意見であった。しかし、授業のつごうと、できるだけ早く印刷する必要から、その話し合いをもつことができないまま、タイプするため次に述べるT子に原稿をまわしたところ、彼女の強い主張により、「愛の讃歌」という題名に決まった。なお、この朗読劇台本の基本的構想は、「近代文学鑑賞講座第十六巻高村光太郎・宮沢賢治」の「樹下の二人」に依拠している。

十月上旬、大手繊維会社の総務課に勤め、職務上、和文タイプをこなすようになっていた女子生徒T子に、台本をタイプするように依頼した。T子の技量では、タイプするために二日間の休日をつぶさねばならないことから、T子は、タイプすることに難色を示したが、次に述べる台本をタイプする理由の(1)、(2)をあげて説得した。T子は、すこしかたくな一面はあるものの、概して明朗な性格で、学習成績の優秀な、何事にも積極的な生徒であった。この場合、熱心な卓球部員であったT子を、教授者が卓球部の顧問として二年次から熟知していたことも助けられた。台本をタイプ印刷にした理由は、次の四点である。

(1) 立派な台本を作成により、従来のようなたたばた劇をやるのではないという意識を、生徒にもたせる。

(2) タイプ印刷の読みやすさは、ナレーターと詩の朗読者の読みにゆとりをもたせ、感情移入を容易にする。

(3) 台本のタイプという努力を払わせることにより、T子を朗読劇に引き込み、その推進者の一人にする。とおりのよい声で、一語

一語の発音が明確なT子を、ナレーターとして起用する必要もあった。

(4) 和文タイプというT子の特技を、クラスの生徒に紹介する。和文タイプは、女子生徒が、将来のため卒業後に身につけたいと考える技術のひとつであった。

四 朗読劇台本の検討と出演者の決定

十月中旬、「現代国語」の授業を三時間使い、完成した台本を通読し、その一節一節について、どのようなスライドをどの場面で映したらよいか、シルエットの演技をどうするか等を検討した。

朗読劇を組み立てるものとして、教師の提示した役割、それに伴う問題点、注意事項等は、次のとおりである。

○ 光太郎・智恵子のシルエット 男女各一名

どの場面で、どういう演技をするかを研究する必要がある。

二人の服装について調べる必要がある。

○ ナレーター 女子一名

一語一語を、適切な音量で、明確に発音することが大切である。

読みの流れと問合のとり方が重要である。

マイクの使い方を練習する必要がある。

○ 詩の朗読 男子一名

ナレーターと同じであるが、詩の情調を表現するための感情移入に気を配る必要がある。

○ 照明 男子二名

単にシルエットを作るだけでなく、照明のみによっても、たと

えば、智恵子の発狂の不安に替える光太郎の気持ち表現することが出来る。それは、ゼラチンの色の使い分け、スライダックスによる電圧の調節によって可能となる。その点をよく研究してみる必要がある。

○ 効果 男子二名

千鳥の鳴き声、風の音、波の音は、捜して録音する必要がある。場面に応じたバックミュージックを選定する必要がある。

○ スライド 男子一名

二つに裂けた磐梯山、きれいな空、汚れた空、砂浜の海岸線等のスライドは必要である。

どの場面で、どのようなスライドを使用したらよいかを研究する必要がある。

○ 舞台 男子一名

シルエットの演技に対応して、すみやかに出し入れできる道具類を考えてみる必要がある。

○ 演出 男子一名

原作者があたる。

台本を書いたK君、それをタイプしたT子の熱意に応じて、自分たちもやろうという意見が、クラスの一部の者に出てきた。台本を検討した三時間の授業にも、生徒は、比較的強い関心を示した。しかし、演劇等に出演した経験のある生徒がほとんどいないことからくるためらいや、誰かがやればよいという空気が一方では強く、積極的出演を望んだ生徒は、五、六人に限られていた。そして、以後は、これらの生徒たちが中心となって、朗読劇を推進した。彼らの大半は、教授者が顧問をしていた卓球部の生徒であったり、担任

する以前から、折にふれて話すことの多かつた生徒たちであった。朗読劇の出版を支えたものは、生徒指導の積み重ねであったように思われる。

出演を望む生徒がいな役割については、生徒の特技・趣味にもとづいて、あるいは、生徒の声により、教師が指名した。

五 個々の出演者の活躍

十月下旬、出演者による検討会を、放課後に二回開き、クラスの意見を参考に、朗読劇における各役割の組み立てを最終的に決定した。この検討会を境として、生徒の取り組みは、次第に熱を帯びてきた。「スライドとシルエットを用いた朗読劇」という着想の第一の利点は、出演者が、その役割に関する作業の大部分を、個別に進めていけばよいという点にあり、それは、生徒の勤務と生活、登校の実態に対応したものであった。第二の利点としては、生徒の特技・趣味を、ある程度生かしようという点にある。定時制高校には、社会人として、何らかの特技・趣味をもっている生徒が多い。その代表的なものとしては、音楽とカメラをあげることができる。

音楽に詳しい効果担当者は、他の音楽好きな生徒と協力して、千鳥の鳴き声、風の音、波の音を、レコードの一部から録音してきたし、バックミュージックについても、愛にひたる二人の喜び、智恵子の発狂の不安におびえる光太郎の気持ちを感じさせる音楽を選定してきた。

カメラの得意なスライド担当者は、「二つに裂けて傾く磐梯山」のスライドを、級友の持っていた絵葉書からの接写という技術を駆使して作り、水島工業地帯の汚れた空や、山ぎわのきれいな空を、同じ寮の級友二人と撮影してまわった。彼らは、砂浜の海岸線を撮

影するため、山陰に行くことまでを計画したが、それを修学旅行の写真から見つけ出し、実行にはいたらなかった。

詩の朗読をしたO君は、教師が直接指導した。寮に帰ってからも練習しているようではあったが、なかなか上達しなかった。あるとき、彼の朗読をカセットテープに録音し、いろいろとその欠点を指摘すると、「もうやらない」と言い出し、怒って帰ってしまったのは困った。正直なところ、彼のそうした態度にはがっかりさせられ、すこし腹もたつた。しかし、その彼を説得し、再び朗読劇に向かわせたものは、同じ寮の級友たちの思いやりであり、賢明さであった。授業のあい間に、O君に詩の朗読をさせてみたことが、二、三度あった。彼のその朗読に進歩を見出して、彼を勇気づけ励ましたということ、のちに他の生徒から聞き、教師として反省させられた。ただ、O君の朗読の稚拙さに変わりはなく、そのため、六篇の詩のうちの二篇は、教師自身が朗読することにした。教師もまた出演者になったわけである。

小規模な定時制高校は、金もなく、設備・備品にも乏しい。器材の多くは、他の学校から借りてこなければならなかった。その運搬は、文房具店に勤めるU君が引き受けてくれた。照明、効果の担当者二名のうちの一名は、授業・学校行事とも、あまり熱心でない生徒をあてていたところ、その二人の生徒も、朗読劇によく協力した。決められた出演者は十一名であったが、個々の出演者が親しい他の生徒を巻き込み、自発的協力者を含めた出演者は、クラスの半数に達したであろう。

六 上演してみて

出演者が揃っての練習を、十一月下旬の休日と放課後を利用して

て、三回おこなった後に、十一月十四日の文化祭当日も近づいたころ、「現代国語」の時間を二時間使い、リハーサルと批評会を開いた。朗読劇の出来栄えは好評であり、生徒は、文化祭における劇のひとつの在り方を初めて知ったところからくる感銘を受けているようであった。

十四日の本番は、リハーサルほどの出来栄えにいたらなかった。次の二点がその原因であった。

(1) 文化祭の前日、効果音用のテープレコーダーが故障し、他のテープレコーダーに換えたところ、カウンターの回転速度が違ふこととに本番になって気づき、二、三箇所予定した効果音がかえなかった。

(2) もともと性能の悪いマイクの調子が、当日は一段と悪かった。しかし、この朗読劇のあいだ、いつも話し声の絶えない会場は、一度一、二の生徒が隣と話を始めただけであった。それも、話し声をとがめる声とともに静まり、生徒は熱心に朗読劇を鑑賞しているようであった。

終演後、智恵子のシルエットを演じた女生徒は、予定通りできなかったと言つて泣き出した。出演者の大半が、卒業までに、もう一度こつた集団制作を試みたいという感想を語りあつていたが、これは実現にいたらなかった。

教師として考えたことは、眠気を催すような授業より、こうした集団制作をおしての学習活動の方が、生徒にとってはよほど勉強になるのではないか、授業にこつたものを組み入れることを考えてみるのではないか、ということであった。

(広島基町高等学校教諭)

△付▽

愛の讃歌——高村光太郎詩集

「智恵子抄」より——

興 柁 喜久蔵

今、私たちの手元に、一冊の詩集があります。

ひとりの詩人が、彫刻家が遺した、一冊の愛の詩集。そのページをめくるとき、私たちは、愛というものの不思議、人の世というものの不思議を、激しく感じさせられるのです。

「愛」は運命的なものです。「愛」によって、人の運命は、しばしば変転させられます。そして、光太郎、智恵子における「愛」は、あまりにも運命的でした。「智恵子抄」の中のすぐれた数篇の詩は、その「愛」の姿をさまざまに語りますが、作者の光太郎にとつて、この詩集は、どれほど苦しく悲しい詩集だったことでしょうか。

高村光太郎と長沼智恵子の出会いは、明治四十四年。そして、結婚はその四年後、大正三年十二月のことでした。私たちは、その出会いと結婚については、語らないことにしましょう。なぜなら、それは私たちが想像するほどドラマチックなものではなかったから。いや、というよりむしろ、この詩集の後半が、あまりにも鮮烈な印象として、私たちに突き刺さるからです。

智恵子の郷里は、福島県二本松。土地の旧家で、酒造家の娘とし

て生まれた彼女は、阿武隈山系のやさしく美しい自然の中で育ちました。

あどけない話

春も終わりに近づいた、うららかなある朝、光太郎は、いつものように自分で朝の食事を用意して、ふだんのように軽く楽しげな智恵子の足音が、二階から近づいてくるのを、今か今かと待ちうけています。でも八時になっても、九時になっても、智恵子は現れませんが。いぶかった光太郎が、二階の寢室へ行ってみると、寢床はもぬけのから。驚いた光太郎は、智恵子の名を呼びながら捜しまわるのです。そうしているうちに、玄関に足音がして、智恵子が帰ってきます。

「智恵さんか。どこへ行ってたんない。僕は心配して、捜しづけていたんないぜ。」すると、智恵子は、あどけない表情でこう答えるのです。

「あんまりいいお天気だから、わたし、空を探しに行ってきたの。空のないのはうちだけかと思ったら、東京には、こんないいお天気でも、どこにも空はないのね。」

智恵子は、根っからの自然人でした。自然そのものでした。彼女の、新鮮な、透明な自然を要求する心にとって、東京の空は、いや、空というより東京の生活は、愛する人と一緒といえども、苦しみに近いものだったのかもしれない。

光太郎は、その著書の中で、「智恵子は、東京に居ると病気になる、福島県二本松の実家に帰ると健康を回復するのが常で、たいてい一年の半分は、田舎に行っていた。」と述べています。

昭和十二年春。光太郎は、その年も病氣療養のために二本松原に帰っている智恵子を訪ねます。愛する人を育んだ自然、そして彼女が言う、阿多多羅山の上にあるというほんとうの空を見るために。

樹下の二人

智恵子が、光太郎に故郷の風景を紹介しようとして連れて行ったのは、二本松町に入ろうとするあたりの、小高い丘陵の上でした。晩秋の空は、ところどころに大まかな白い雲をぽかりぽかり浮かせて、智恵子のほんとうの空は、なるほど、今まで光太郎が、他のどんな土地でも見知らなかった空に違いありませんでした。

二人は、光太郎が脱ぎ捨てたマントの上に、肩を寄せ合って座ります。空には南風が吹くのか、白雲は静かに北方に流れて、松の根かたは風もなく、日はよくあたり、小春日和のおなごりのような温かさでした。光太郎は、智恵子の肩を抱き、彼女の生まれた土地の自然にやさしく迎え入れられ、吹き渡る風とその情意を洗われる喜びにひたるのでした。

このとき二人は、おそらく、生涯の中での絶頂だったのかもしれませんが。二人の生活の楽しさ、明るさの極限でした。しかし私たちは、その幸福の絶頂の裏に、ひとつの影を見ます。それは、あたたかも、大海原の空に浮かんだ、一点の黒雲のようでもありません。

昭和六年七月。光太郎は、三陸地方へ旅に出ます。家を出て二十日あまりたったある日、彼は、一通の葉書を受け取りました。それは、留守を頼んだ智恵子の姪からのものでした。

「伯母様は、昨夜、睡眠剤の分量を間違えたため、今日、九段階

院に入院しました」

「自殺未遂」、とっさに光太郎の脳裏に浮かんだのは、その言葉でした。とるものもとあえず東京に帰った光太郎は、その足で九段の病院に駆けつけます。そして、そこで逢ったのは、異常なほどに明るく智恵子だったのです。それは、精神分裂の最初の兆候でもありました。

一カ月の病院生活ののち、退院して家に帰っても、智恵子の病状は悪くなる一方でした。ますます憂鬱げになり、ときどき悲しいはずのことを語り出しては、さもおもしろげに笑っているなど、以前にはなかったようなことを見ることもしばしばでした。

翌昭和七年初夏。暑さの加わるとともに、ますます彼女の沈鬱な様子が目立ってきたのを見かねた光太郎は、智恵子を東北の涼しい温泉に連れて行こうと決心するのです。涙をのんで手放したロダンの作品集で得た金をふところに、二人が、磐梯山のふもとにある川上温泉に向かったのは、六月のことでした。「裏磐梯は阿多多羅山の西方にあたるから、同じほんとうの空を見せながらも、阿多多羅山の山容は、智恵子には全く新しい見ず知らずの山として、彼女の傷ついた思い出に触れることもあるまい」という光太郎のやさしい心づかいが、この土地を選ばせたのでした。

静かな川上温泉の宿に落ち着いて、二人は、十日ほどのあいだ、毎日のように磐梯山のよく見える桧原湖に足を運ぶのでした。湖は、神秘に重厚な色を深くたたえ、遠く磐梯山は、その二つに裂けた体を天に屹立させているのでした。そして、それは、あまりにも美しく悲しい風景でした。

ある日、湖からの帰り、二人は、野中の道端ですすき原の中に腰

をおろして、阿多多羅から磐梯のあたりを見渡していました。高原の秋は早い、そこらあたりに漂う大気の中にも、また、空の青さの中にも、二人は秋を感じるのです。

山麓の二人

人の生涯には、ときとして不可抗力の運命が襲いかかってくることもあるものです。そして、その運命から逃れることのできない悲しみが、私たちの胸にすくたく突き刺さってくるのです。運命の無慈悲。生涯をかけて愛した人を断崖の向こうへ連れ去られようとする悲しみ、いかにしても取戻すことのできない悲しみ、腸をえぐられるようなその痛み、光太郎は、この悲しみをいったい誰に訴えようとしたのでしょうか。

智恵子の精神の内部で容易ならぬ状態が進行しつつあるのを知った光太郎は、東京の医者 of 診断を受けるべく、川上温泉を発ったのでした。いたずらに希望をかけ、貴重な犠牲を払って旅立ちした光太郎は、前よりもさらに悪い状態になっている智恵子を連れて、あの東京へ帰るのです。

昭和九年早春。智恵子の病状は、ついに幻覚を見るまでに進行しました。そして、その幻覚を見たのも春のひと時で、あまり長くはつづかず、その次には、意識が全体としてもうろうとなり、ついには全く失われてしまったのです。

その年の五月、悪化する智恵子の病状を悲しんだ光太郎は、一筋の望みを託して、彼女を千葉県九十九里浜の漁村に転地療養させました。

光太郎が、一週間分の薬や菓子や果物を持って東京からやってく

ると、智恵子は熱っぽい息の中で、彼を喜び迎えるのでした。二人は、砂丘づたいに防風林の中を歩きます。そして、小松のまばらな、いくらか小高くなつた砂の上に腰をおろします。五月の太陽はすこし斜めに白い砂を照らし、そよ風は海から潮の香を含んで、青々とした松の枝をかすかに鳴らすのでした。防風林の黒松の花粉は、海から吹き寄せる風に乗り、飛ばされ、智恵子の沿衣の肩に薄くつもるものでした。光太郎は、やさしくその花粉をはらってやりま

千鳥と遊ぶ智恵子

「病熱はまるで機関車のようにばく進してきた」

智恵子は、品川のゼームス坂にある精神病院に入院します。彼女は、ここで毎日のように紙絵を作ります。先のとがったマニキュア用の小さな缺で色紙を刻む智恵子、そして、それをやさしくじつと見守る光太郎。智恵子は、その色紙を誰にも見せようとはしませんでした。見せたがるのは、ただ、光太郎だけ。智恵子にとってその紙絵は、遠い意識の世界からの恋文だったのでしようか。光太郎は、紙絵の中に、まだ智恵子との間に一脈の連絡が残っているのを知って喜ぶのでした。

昭和十三年十月五日。早朝、光太郎は病院からの電報を受け取ります。「スグオコシネガウ」。電文から容易ならぬものを感じた光太郎は、明日とだけようと用意していたレモンを携えて、病院に駆けつけるのです。

「粟粒性結核」、この、結核の中でも最も急激なものといわれる病に、智恵子の体は、もうどうしようもない程むしばまれていたの

です。夜半、病状は急に切迫したかのように見えました。智恵子は真白な病床の中で、静かに我が身の最期を知っていたかのように、かねて用意してあったらしい紙絵の包みを、微笑を含んで光太郎に手渡すと、美しく澄んだひとみで、光太郎に心のやすらぎを伝えるのでした。

レモン哀歌

智恵子は、光太郎のもとから永遠に去りました。智恵子を失った光太郎は、深い悲しみと絶望の中に毎日を送るのでした。夜明けの窓にきて鳴く雀に智恵子のささやきを思い、枕辺に咲き出したグロキシニアにもいわぬ智恵子を思い、早春の朝風に智恵子の香りとその冷やかに弾力のある肌を思い、夏の朝日には智恵子のかげやかな笑いを思い、夜の闇には智恵子の息吹を感じるのでした。

ある日、彼は、アトリエの側にある厨から、一本の梅酒の瓶をみつけるのです。それは、智恵子が光太郎のために秘かに造つておいたものでした。

すっかり静まりかえった春の夜更け、光太郎は、この甘く熟した梅酒の味わいの中に、亡き智恵子を想うのです。

梅酒